

〈東洋史学専修〉

齊桓公説話の成立と発展

松下 祐樹

古来、春秋時代は「覇者の時代」として理解されてきた。何故、春秋時代は「覇者の時代」と理解されてきたのか、そもそも「覇者」とは何なのか、これは春秋史研究に長年横たわってきた重要な問題であった。この問題に関する研究を行う上で基本史料となるのは『左伝』や『国語』を中心とした種々の説話史料である。従来の研究はこうした史料に基づいて覇者像の復元を試みてきた。これらの史料は、いわゆる通説に見える中原の総覧者としての覇者像の根拠となっている。しかし、私はこうした『左伝』や『国語』などの伝世文献に基づく覇者理解にひとつの疑問を抱いた。それは、こうした覇者理解が齊桓公や晋文公の春秋時代における同時代的実像を正確に反映しているのか、というものだ。

従来から言われているように『左伝』や『国語』に収められた種々の説話は必ずしも春秋時代に形成されたものではなく、春秋時代から数百年の伝聞過程を経て現代の形態に纏まったと考えられている。したがって覇者の説話には後世の潤色が想定される。そのため『左伝』や『国語』の説話は、同時代的状況を正確に反映していないかもしれない。これは覇者研究を行う上で大きな制約となってきた。こうした史料制約を乗り越えて覇者の同時代的実像を復元するためには、まず覇者に関する説話史料を網羅的に比較検討してそれぞれの史料性格やその成立年代などを検討せねばならない。私が卒論で検討の対象とした史料は、主に漢代までに成立したと考えられる齊桓公説話である。検討する期間を漢代までとしたのは、現在に伝わる多くの覇者説話の原型がこの時代までに成立したと考えられるからである。検討対象を桓公説話のみに絞ったのは歴史上、桓公が最初の覇者として最も重視されてきたいわば覇者の典型とされ

てきた人物だからである。また私が卒論で取り扱う桓公説話の定義として定めたのは、起承転結があり一定の物語性を有する説話である。起承転結が無い説話は桓公の歴史の実像を復元するのに寄与しないと考えたからである。以上のような基準に基づくと、検討の対象とする桓公説話は『春秋左氏伝』、『春秋公羊伝』、『国語』、『管子』、『韓非子』、『呂氏春秋』、『史記』、『説苑』、『淮南子』の九つに収録されている。卒論ではこれらの文献が収録する説話をその内容から分類し、同一の範疇に含められるもの同士を比較検討することでその史料性格を明らかにしようとした。

上述のように桓公説話の定義づけを行った後、私はこれらの系統化に取り組んだ。説話の系統化を行う際、基準となったのがその内容である。桓公説話を通覧すると、当該説話群には大きく分けて二つの傾向があることが分かる。一つは特定の舞台設定が語られず、ある種の思想を述べることに主眼が置かれた理念的説話であり、もう一

つは確實に史実とは言えないものの、桓公の具体的な事績を描き、そこから教訓を見いだす史實的説話である。以上の二大分類を基盤として桓公説話の分類作業を行ったが、こうした作業を行った目的は桓公説話の形成過程を明確化することであった。桓公説話の中には様々な時代の思想の断片が垣間見え、ある一つの説話だけを取り上げてみても、その全文が一時代に成立したものだとは考えにくいのだ。よって桓公説話を吟味するためには、説話を内容に応じて分類し、同一系統に属する説話同士を対照して検討を進めねばならない。

前述のような行程を経て、最終的に卒論は三篇構成となった。第一篇では前段で述べたような理念的桓公説の検討を、第二篇では史實的桓公説話の検討を、そして第三篇では第一篇と第二篇の総括をそれぞれ行い、桓公説話の成立過程と史料性格について言及した。以下に各篇での議論から如何なる事柄が検証されたのか、概略を述べる。

第一篇では三章に亘って理念的齊桓公説話の比較検討を行った。ここで見えてきたのは、春秋以後に桓公説話を語り継いだ人々の思惑を反映し、彼らの理念によって解釈された桓公の姿であった。理念的説話は、後世に生じた概念を春秋時代の齊桓公に仮託しているに過ぎず、歴史的記録としての価値は乏しいという事が言えるだろう。従ってこれらの説話は、春秋時代における桓公の史実実像を明らかにするためよりも、桓公説話が語られた時代の思想的潮流を説明する上で有用な史料であるということになる。とはいえ、理念的説話から復元できる歴史的事実も確かに存在する。理念的桓公説話は主に戦国時代の遊説家達が自分を君主に売り込むための方便として成立、発展したと考えられる。理念的説話がこうした場面で利用されるからには、史実としての桓公も、後世の人々が理念を投影するに値するだけの実態があった筈である。もしも、桓公が理想とはかけ離れた無能な君主であれば、後世の識者達はまったく別の人間を

規範として賞賛したことだろう。桓公が尊崇の対象となっていたということは、桓公が春秋時代に重要な存在であったということとの表象なのではあるまいか。史實的な桓公像を復元するためには、平行して觀念としての桓公像を総合的に理解しておかねばならない。第一篇での議論によって、理念的説話は桓公の同時代的実情を描写してはいないものの、桓公の史実実像の解明という私の最終目的を達するために重要な史料であるということが確認された。

第二篇では三つの章を設けて史實的説話について検討した。史實的説話は理念的説話と異なり、桓公の歴史的な事績を解釈するという方法で語り手の觀念を表現していた。したがって、史實的説話は理念的説話以上に桓公の具体的な行為に関する記述が多く、史実の復元を行う上で直接有用な記述が多い史料であると考えられる。しかし、ここで留意しておきたいのは、説話の登場人物の発言に散見する様々な理想が、必ずしも春秋時代的なものではない可能性であ

る。例えば、多くの説話で桓公は高い評判を得ているのだが、これらは彼が成功した理由を春秋以後に成立した可能性の高い思想に基づいて説明していると考えられる。

このため、ある桓公説話に何らかの史実的要素が含有されていても、説話中で語られる思想をそのまま同時代的なものであると判断してしまえば、事実を大きく見誤ってしまうだろう。史実的説話の態度としては、行為の根拠として示される理念の記述について留保を行いつつ、戦争や外交といった具体的政治行為のみを歴史的事実として扱うというようなものが望ましいと考えられる。

第三篇では、第一・二篇で検証された同時代的と考えられる桓公像を結集し、その総合を試みた。これによって従来周王室と密接に結びつき、中華世界を防衛していたと考えられてきた覇者としての斉桓公像は極めて不正確であったということが分かった。説話の内容を鑑みるに、春秋時代において、桓公は優れた人材を活用することで

内政を充実させ、対外的には中原の周縁部に對して軍事行動を行うことで侵入者を阻み、諸侯の間に存在感を示していたようだ。そこには従来の定説で語られていた様な周王の代権者としての覇者の姿を見ることは出来ない。説話の検討から見えてくる同時代的桓公像は、ある面では従来の桓公理解と重なる部分もあったが、桓公の勢力範囲や戦争目的など認識を改めねばならない部分が多かったのである。

以上三篇の検討によって、桓公説話がどのような性格を有し、どのような史実を反映しているのか、ということが見えてきた。桓公説話というものは、春秋時代に存在した斉桓公という有力な君主の伝記的記録を基盤として、戦国以後の思想潮流の中で発展した物語なのである。しかしその物語には春秋時代の史実の断片がたしかに存在しているのだ。卒論ではひとまず斉桓公に焦点を絞って考察を行ったが、私が目標とするのは覇者の春秋時代における同時代的実像の解明である。そのため今後は、桓公以

外の覇者にまつわる説話史料について卒論と同一の方法で検討を加え、その史料性格を明らかにしていかなければならないだろう。

〈西洋史学専修〉

チトー治世時における

ユーゴスラヴィア

田野口 悠香

本論文では「七つの隣国、六つの共和国、五つの民族、四つの言語、三つの宗教、二つの文字、一つの国」と表現されるユーゴスラヴィア社会主義共和国連邦と、その最高指導者であり、終身大統領でもあったヨシップ・ブロズ・チトーとの関連性に焦点をあてている。複雑な状況であったユーゴの民族問題や国内政策を安定化させることが出来たのは、チトーが連邦国内での政策決定に際し、様々な場面で共通要素として機能したことが大きな要因であるとの考えが本論の主旨である。彼が行なった国内、